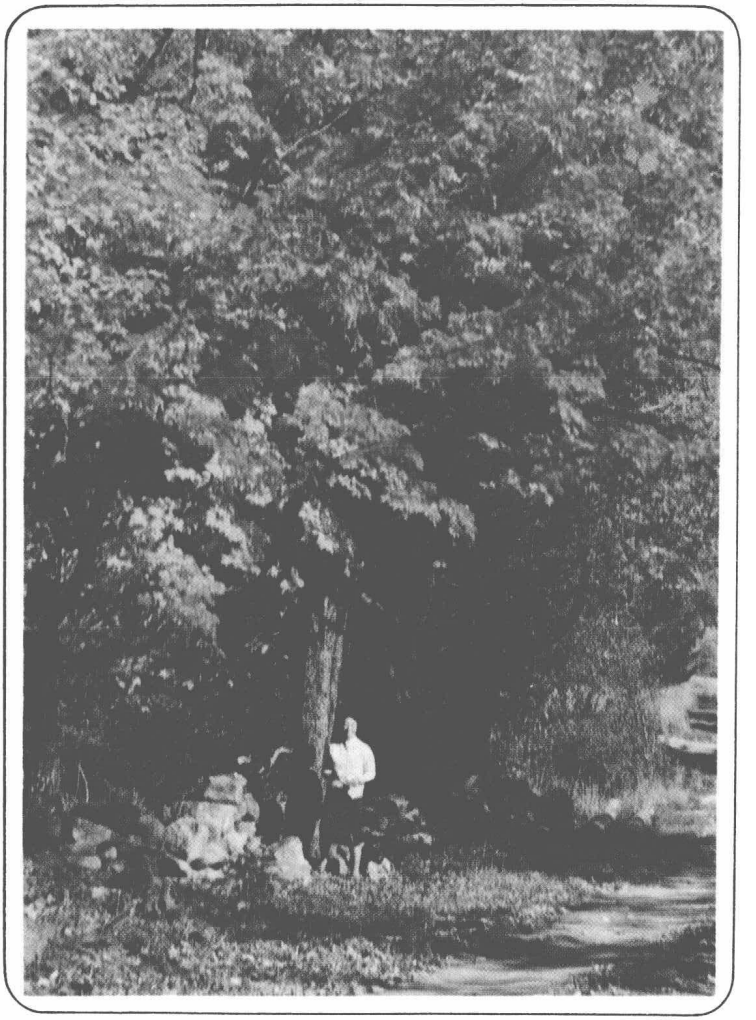
犬養道子

マーチン街日記

マーチン街日記



河出書房

犬養道子
マーチン街日記

昭和42年10月10日　初版印刷
昭和42年10月15日　初版発行

定価390円

著者　犬養道子
発行者　河出朋久
印刷者　堀内文治郎

発行所　東京都千代田区神田小川町3の6　株式会社　河出書房
電話東京(292)3711大代表
振替口座　東京　10802

印刷・堀内印刷　製本・小泉製本
© 1967

犬養道子　マーチン街日記　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

SEPTEMBER 九月 7
OCTOBER 十月 55
NOVEMBER 十一月 81
DECEMBER 十二月 97
JANUARY 一月 117
FEBRUARY 二月 149

MARCH 三月 171
APRIL 四月 197
MAY 五月 217
JUNE 六月 261

写真 片山利弘

装幀 田中一光

マーチン街日記

SEPTEMBER

一九六四年九月六日（日）晴

来週から住むことになるアパートの管理人に会いにマーチン街まで出かけることにして、ホテルの前のボイルストン駅から地下鉄に乗ったが、十八年前あんなにちょいちょい乗っていた地下鉄の乗り換えのときのお金の入れ方を、すっかり忘れてしまってヘマをやって車掌に注意された。

終点ケンブリジで降りて、広場（スクエア）に出ると夏の名残の日射しが妙に明るくまぶしかった。マーチン街は、うすらわびしい北ケンブリジ町と、ハーヴァード大学やラドクリフ女子寮やＭＩＴを擁する学都ケンブリジ――その名は、ハーヴァードが創設された一六三六年（三代将軍家光の頃）、まだ新英国（ニュー・イングランド）人と自らを呼んでいた人々が、故国英国（イングランド）の大学ケンブリジを偲んでつけたのだった――とを結ぶマサチュセッツ・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アヴェニュウから、ちょっと左に折れたところにある。広場からは十七、八分の距離だ。うねうねと曲った街（ストリート）だった。木の多いのがよい。しかもみごとな木々である。梢ごしに陽がキラキラとアスファルトに映えて、そこらいちめんに木々の影を大きくうつし出していた。

管理人のボブは、背中が痛んで（これは持病だそうだ）病院に行っていたので、昨日連絡を頂いたがおめにかかれなくてすまなかった、と、両手をもみながら、くどくどと詫びた。小心な律儀者であった。なるほど病気持ちらしく異常にくすんだ顔色をしている。彼の住む半地下の部屋でアパート規則などを聞かされたが、半地下特有の湿気と陽の目をついぞ見ないこの部屋のくらさは身にこたえるだろう。

ボブの家と限らず、ここケンブリジと限らず、アメリカの方々の町には――いやヨーロッパにも、半地下住まいをする人間は大へん多い。こういう非人間的な住居に、日本人なら半年とがまん出来ないだろうに。妻のアイリンは、これ以上の色白は世界中さがしたって見つかるまいと思われるほど色が白い。陽の目を見ないからだろう。彼らの部屋にくらべ、一階東南の角の私のアパートは、窓一杯の陽光がむしろうるさいほど明るい。あす十時に越すことにして、鍵の束をもらい受けた。

十六世帯の住む古い煉瓦づくりの、それだけにいかにもおちついた家である。どの世帯も洗濯機は持っていない、とアイリンが言った。そのかわり地下に共同の洗濯機とドライヤーがある。料金は一回十五セントだとも言った。「でもちょっと歩けば、

セルフサービスのランドリーは、この辺だけで五つ六つありますからね。」

台所には冷蔵庫とガスレンジはそなえつけてある。お湯はいつでも出る。家賃百二十五ドル、敷金礼金などという奇妙なものは一切ない。家具は、研究室から程近いプトナム家具店の貸家具をもうたのんであるから、あす、それが搬入されるのを待つだけでよい。引越は、だからきわめて簡単で、私のすることと言ったら、自分のからだをここまでスーツケースと一緒にはこんで来ればよいのである。

帰途、十八年前の貧乏たらしい留学生活の頃、週末をたびたびすごしたジャメイカ・プレインの丘から月曜の朝というときまって出かけて行った「勝利の聖母」の教会に寄ってみた。この教会のはす向いで、ジャメイカ・プレインからボストン中央まで来るバスを降り、カレジのあるウェストンまでゆく次のバスを待つ間、早朝のミサにあずかったものであった。教会そのものは変らないが、周囲は変った。裏手ではブルドーザーが唸りをたてて赤い土を蹴立て掘り上げていた。ここも東京も、どこもかも都会は変容しようとしている。

――隔離されたことを痛く感じる。そして、この隔離されたという気持の中から、長い間忘れていた祈というものが、再び甦って来たようである。祈とは、心の中の雑音を、雑音よりはるかに強い沈黙を以てしずめることからはじまる。それは一つの静かな充溢と私には思われる。私は心の中で、唇の上で、おしゃべりを――種々雑多の、こまぎれの、饒舌なだけでみのりの乏しいおしゃべりを――しすぎて来た。馴れ

すぎた環境の中での馴れすぎた多忙さが、そのおしゃべりを私にさせつづけていた。いま必要なのは、音を出すだけで意味を創造することの乏しい、そうしたおしゃべりからはなれることだ。心において、唇において、沈黙を生むことだ。いつか、ほんとうに「言葉」を語れる人間となるために。

隔離、と私は書いた。何からの隔離か。

自分の身辺に自分で築き上げ、それをよしとし、その中に一種の安心感とこころよさとを見出していた、これまでの生活様式からの隔離である。馴れからの隔離である。社会的な地位や、少々人に知られた名前や、経済の一応の基盤を得た安逸感からの隔離である。ふだんは別段何とも思っていなかったそれらに、「安定」の根のいかに大きな部分を置いていたかが、いま、わかって来た。そんなものは、「安定」ではないのに。そういうものからぱっさりとはなれて、一介の研究所員となって、このアメリカという土地に来てみて、はじめて、自分がいかに既成の地位や基盤に精神的にもよりかかっていたかがわかったのであった。

加えて、年齢と共に強烈になって来た、「自分の」好みにそってしつらえた部屋や庭や調度などの「自分の」世界からの隔離。「自分の」生活リズムからの隔離。

アメリカに来たのはよかった。人間は、生活リズムや「自分の世界」や、築き上げた地位基盤などによりかかり、それらの中にここちよく安住する安易さから、たえず自分をふりほどかねばならぬ。空天の中に宙吊りにされたような、のっぴきならぬ気

持に、また、安逸をはなれた精神の孤独に、屢々かえってゆかねばならぬ。その気持と孤独の中でだけ、人は――少くとも私は、自分自身と出あうことが出来、沈黙と呼ばれる豊饒の中で、自分の「言葉」を生み出すことが出来る。

夜、一種の空白が来た。

ホテルの窓に倚って見おろすと、ボストン市内の灯はきらめきひしめき、またたく光の洪水であった。私はその光を見つめて長い間立っていた。ここにも、愛し憎み傷つき苦しみ働く人々の生活が、東京と同じようにあるのだ――そんなことを何となく考えた。――この空白は一体何であろう。素朴単純な後顧の憂いか。羽田のガラス戸ごしに見た、淋しそうな母の、いまだ眼にのこる、あのめっきり老いた姿のさそう後顧の憂いか。いや、そんなものではない。我を通し、自己の進む道だけをみつめて、こうやって母をのこし仕事をなげうって出て来た、そのことに対する一種の悔いが生み出す空白感なのかもしれぬ。我を通すとは淋しいことなのだ。これからの夜は長い。秋から冬へ。その夜長を母は一人でどうすごすのであろうか。

九月七日（月）

アンデルセンのお伽噺に「大きな悲しみ」という一篇がある。小さな子供が、飼っていたカナリア（であったと思う。ずいぶん昔読んだ話なのでこまかいところは忘れた）に死なれて、裏庭に墓をつくり、兄弟（あるいは友達だったろうか）とおもちゃ

の鉄砲で礼砲を射つという話であった。子供の胸はカナリアへの哀悼で一杯になり、はりさけるばかりの悲しみで、子供は小さなからだをふるわせた。

いまの私にも「大きな悲しみ」がある。

他人からみれば——まして分別くさい「おとな」から見れば、取るに足りないカナリアの死も、当の子供にとっては、その時の彼に背負い得、耐え得る最大の荷であり十字架であり悲哀である。それは愚かな悲しみかもしれぬ。しかし、悲しみであることに変りはない。

私にとってのカナリアは、物を言わずしかし感じとり、無償の愛と信頼を以ていつも私のそばにいたあの犬である。あの犬に対して、私は友情という言葉の意味する一切を抱いていたにちがいない。そんな風に考えたことは今まで一度もなかったのに、あの犬と別れたあとのこの悲しみからすれば、あれはたしかに友情であったのだ。

あの犬は、私のいなくなったことを、どう感じているのだろうか。レオン・ブロアであったか、動物の悲しみというものをキリストの受難に結びつけて、激しくも美しく書いたことがあった。彼によれば、物言わぬ動物たちの悲しみは、ことばによって慰められることがないだけに、理性によって理屈づけられることがないだけに、一層深く一層純であり、それは救いの成就される日までつづくこの天地の疼痛と号泣の象徴そのものである。負いきれぬ荷を負ってあえぐ馬、恐怖のありたけを感じながらボロ布のように殺される犬、屠所に曳かれてゆく羊や牛——彼らの悲しみは物言わずゴ

ルゴタの丘の上の木片にぶら下る「人の子」の悲しみの中に吸いとられて、贖罪と救済のための塩になる、とブロアは言った。

どうも奇妙だ――十八年前、留学生としてはじめてこの地を踏んだとき、時折の郷愁はあっても、こんな風な悲哀や、隔離されたことの痛みはなかった。おそらく、若かったせいであろう。築き上げ、馴れ切り、根をそこにしっかりとおろした生活基盤がまだなかったせいであったろう。そういうものをいつかつくり上げる成長した人間となるべく、十八年前の私は日本を離れてここに来た。こんどはまるきりちがうのである。だから悲哀と空白とが心を襲うのだ。

それにあのときは、犬はいなかった。ちょっと出っ歯で、とろんとした眼を持つあの小さな犬は、「人の子」の悲しみも、贖罪の意味も知りはしない。本を読んだことがないからである。あの犬は、ブロアの言うような役割を、主人からむりやりに離されたいまの自分の悲哀が果しているとは知らない。さぞ悲しんでいるだろう。私が帰るまで生きているかしら。

愚かしいと悟りつつ、こんや私は悲しみで一杯である。

引越は私自身に関する限り大へん簡単にすんだ。自分をはこびさえすればよかった。ボブの家からニュー・イングランド電話会社に電話をひいてもらいたいと連絡したら、これも驚くばかり簡単に、すぐ来てつけてくれた。架設費十四ドル。家具屋は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com